

感懷（劉長卿）

秋風 落葉 正に 悲しむに 堪えたり

黄菊の 残花 誰をか 待たんと 欲す

水 近うして 偏に 寒気の 早きに 逢い

山 深うして 長えに 日光の 遅きを見る

愁中 命を トして 周易を 看

夢裏 魂を 招いて 楚詞を 誦す

自ら 笑う 湘浦の 雁に 如かざるを

飛び 来るは 却って 是れ 北に 帰るの 時

秋風落葉正堪悲 黄菊殘花欲待誰

水近偏逢塞氣早 山深長見日光遲

愁中ト命看周易 夢裏招魂誦楚詞

自笑不如湘浦雁 飛來却是北歸時

解説 無実の罪で姑蘇の獄に繋がれていた時の秋にわき起こった思いを詠じた。

語釈 ※堪悲||非常に悲しい。 ※逢寒氣早||寒さの訪れが早い。 ※見日光遲||日光の光が射すのが遅い。 ※ト命||自分の運命を占う。 ※周易||五經(易經・書經・詩經・礼記・春秋)の一つで、「易經」のこと。 ※楚辭||中国の戦国時代の末、楚国の屈原(中国、戦国時代の楚の詩人、政治家)のつくった詞賦と、同じ作風の弟子や後人の作を集めた書物の名。 ※招魂||自分の魂を招きよせること。 ※楚詞||楚辭のこと。 夢に魂を招く。 ※湘浦||湘江(洞庭湖に注ぐ川)の岸边。

通釈 秋風に散ってゆく木の葉を見ていると、非常に悲しい。あの枝に残っている黄菊の花はいつたい誰を待っているのだろうか。水辺に近いために寒気がことさらに早くおとずれ、また山が深いので、日のさすのはいつも遅い。愁いに沈む時、自分の運命を占おうと周易を見、夢の中で魂を招き寄せようと、楚辭を読む。あの湘江の岸辺を飛んでいる雁にも劣るわが身をあざわらう。あの雁たちはここまで飛んでくると、もう北に帰って行くのに、自分にはその自由さえ無いのである。